

住友四百年

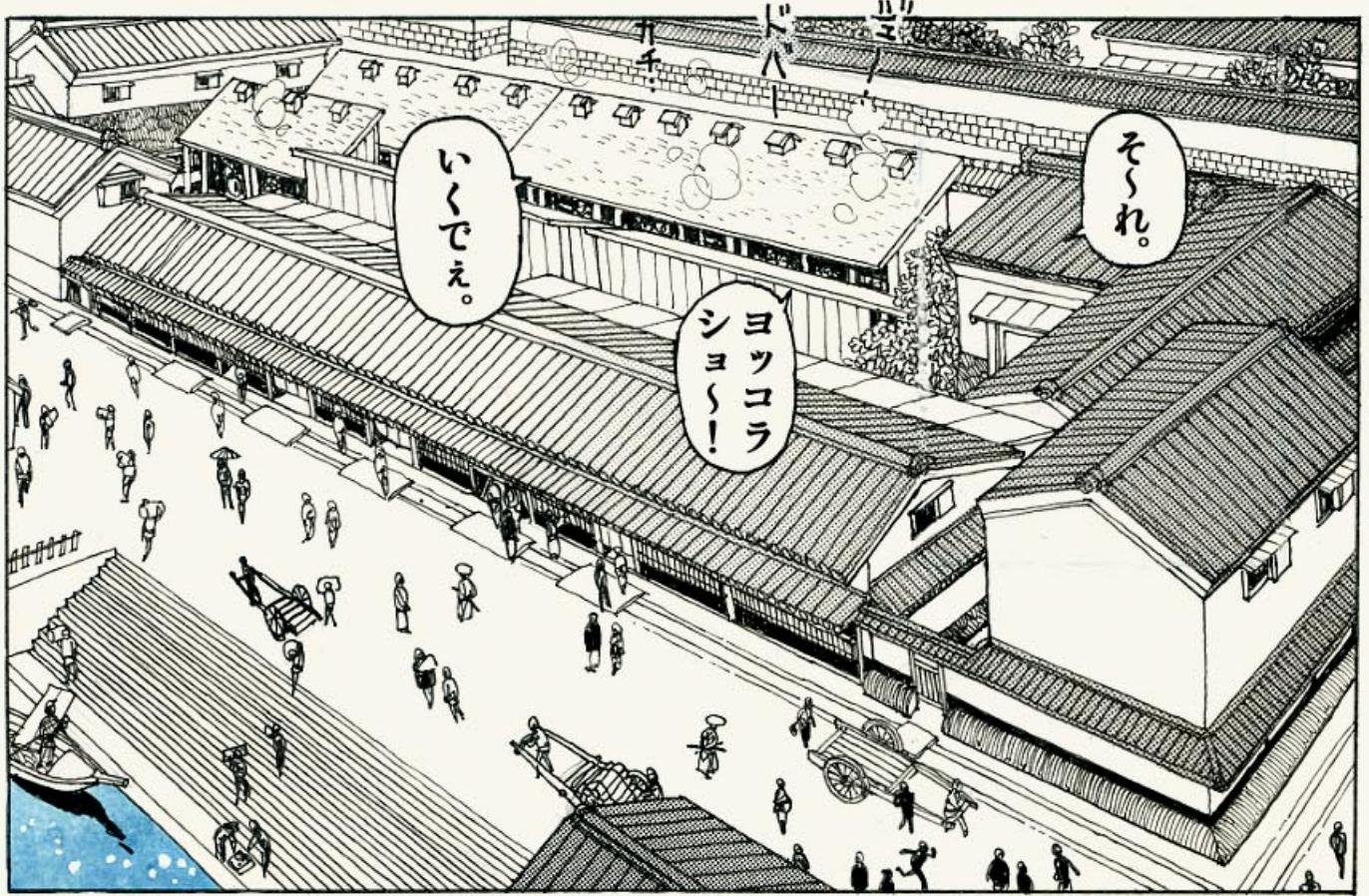
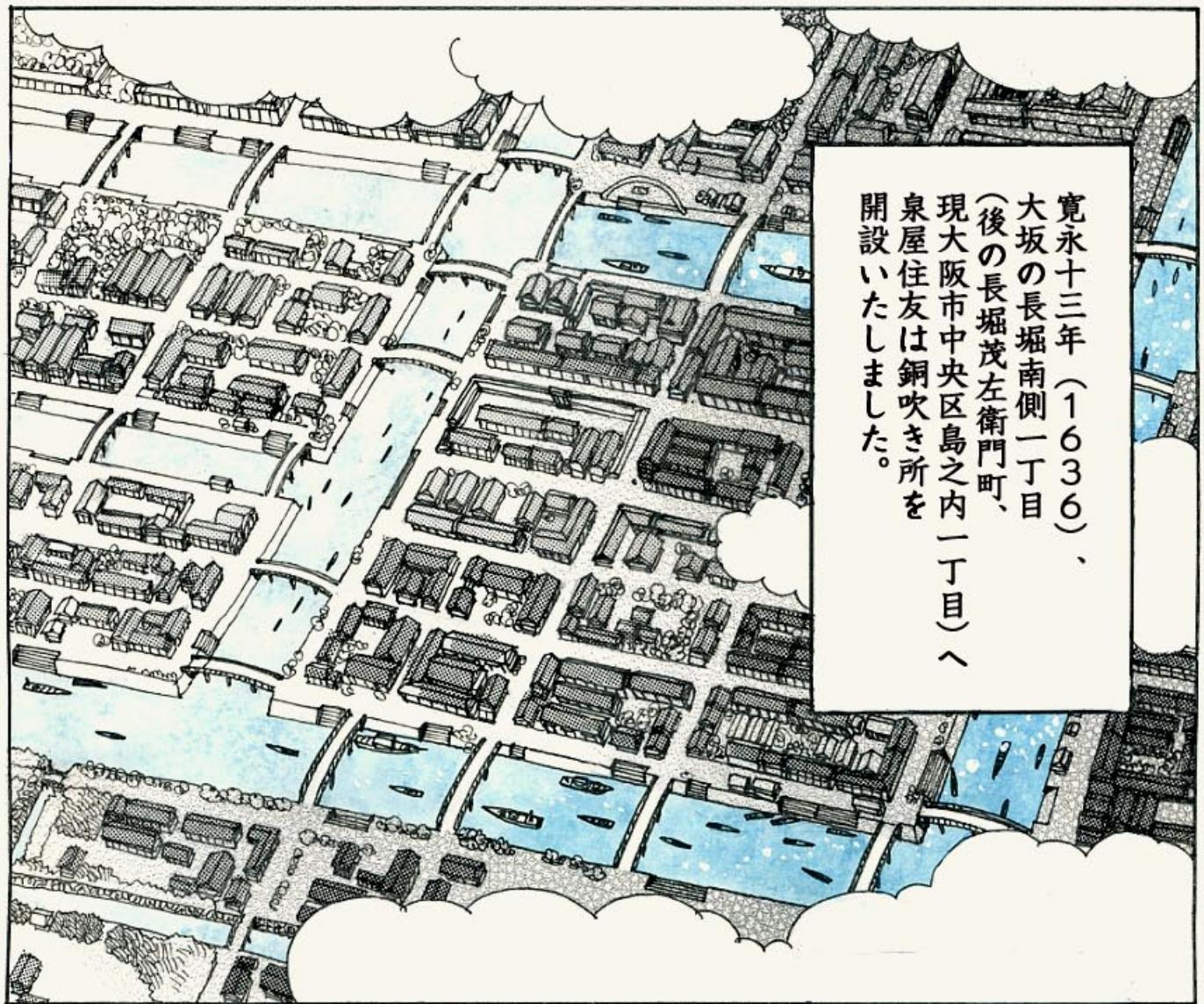
源 泉



第五話 「歓喜の銅山発見！」
作：西ゆうじ 画：長尾朋寿

◎この作品は、住友の歴史を参考にして創作された物語です。◎

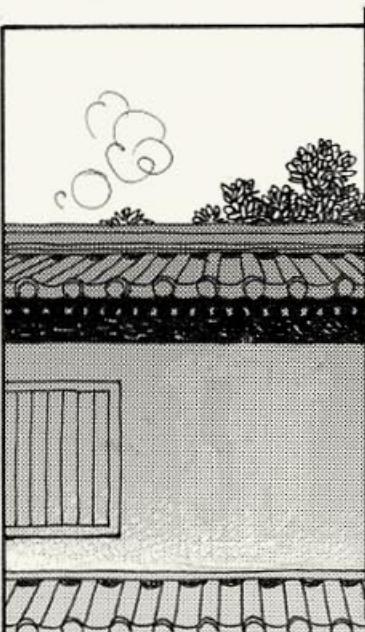
寛永十三年（1636）、
大坂の長堀南側一丁目
(後の長堀茂左衛門町、
現大阪市中央区島之内一丁目)へ
泉屋住友は銅吹き所を開設いたしました。



この地は大坂の周縁部でございましたが、わたくしども泉屋住友の進出と義父・蘇我理右衛門様考案の南蛮吹きの技術公開、海運の便の良さで、多くの銅関連業者が集まることとなり、



その後には、銅吹き屋が十七軒、銅細工屋が三十二軒と、日本一といえ、世界でも有数の銅の町となりました。

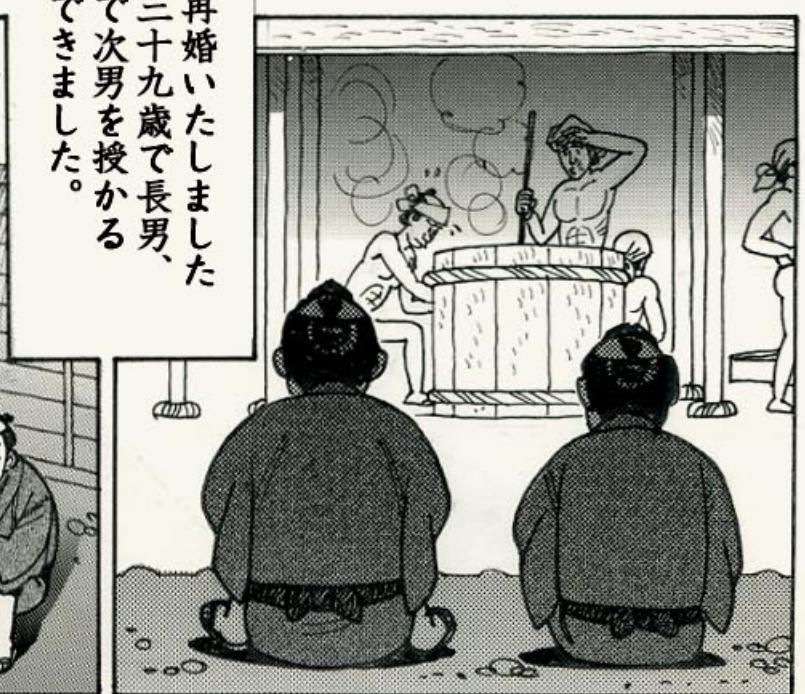
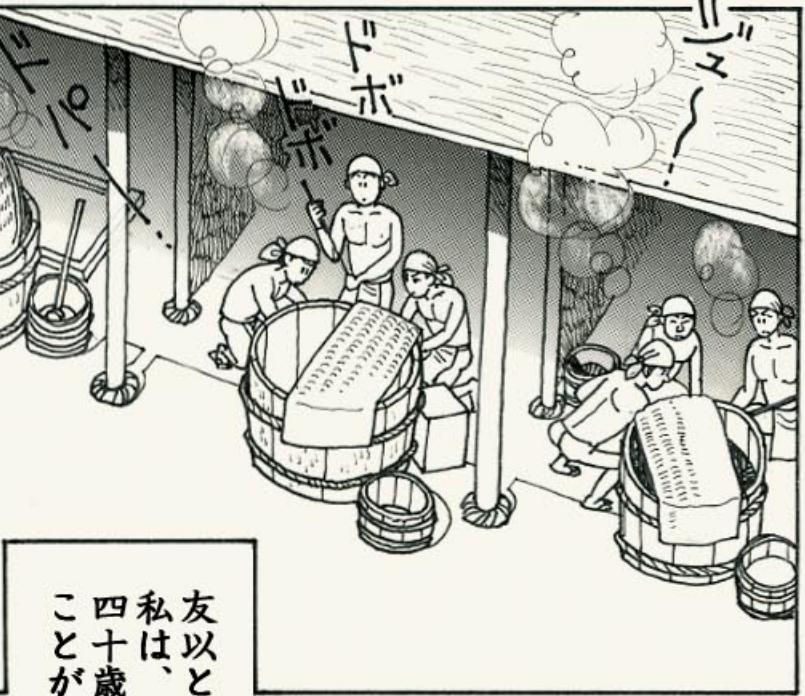
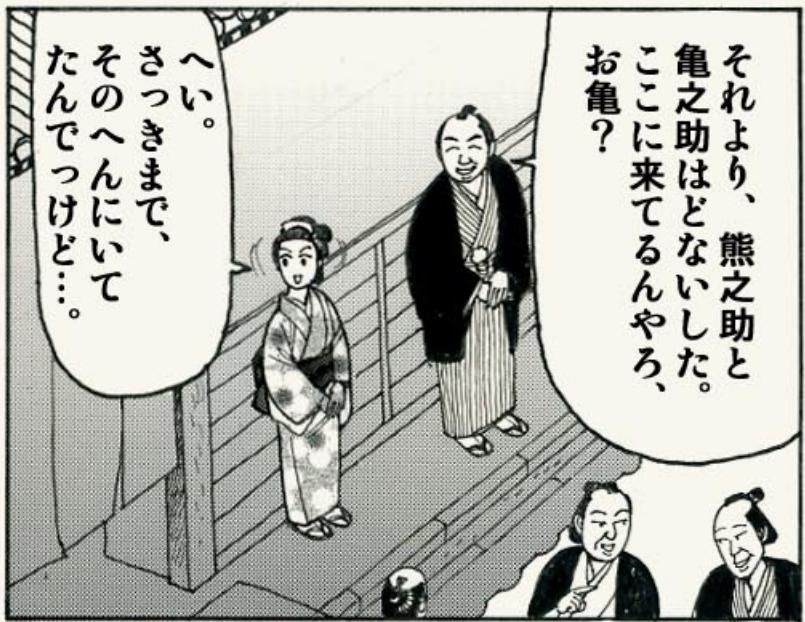


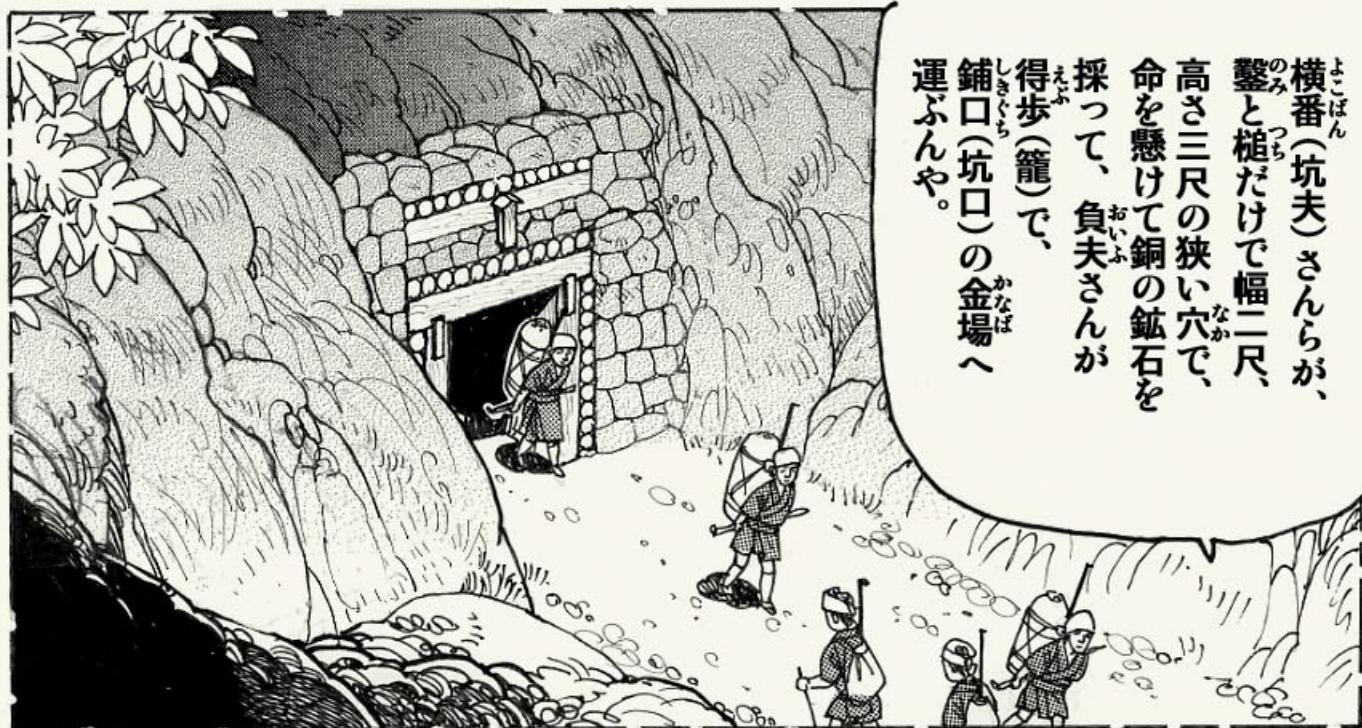
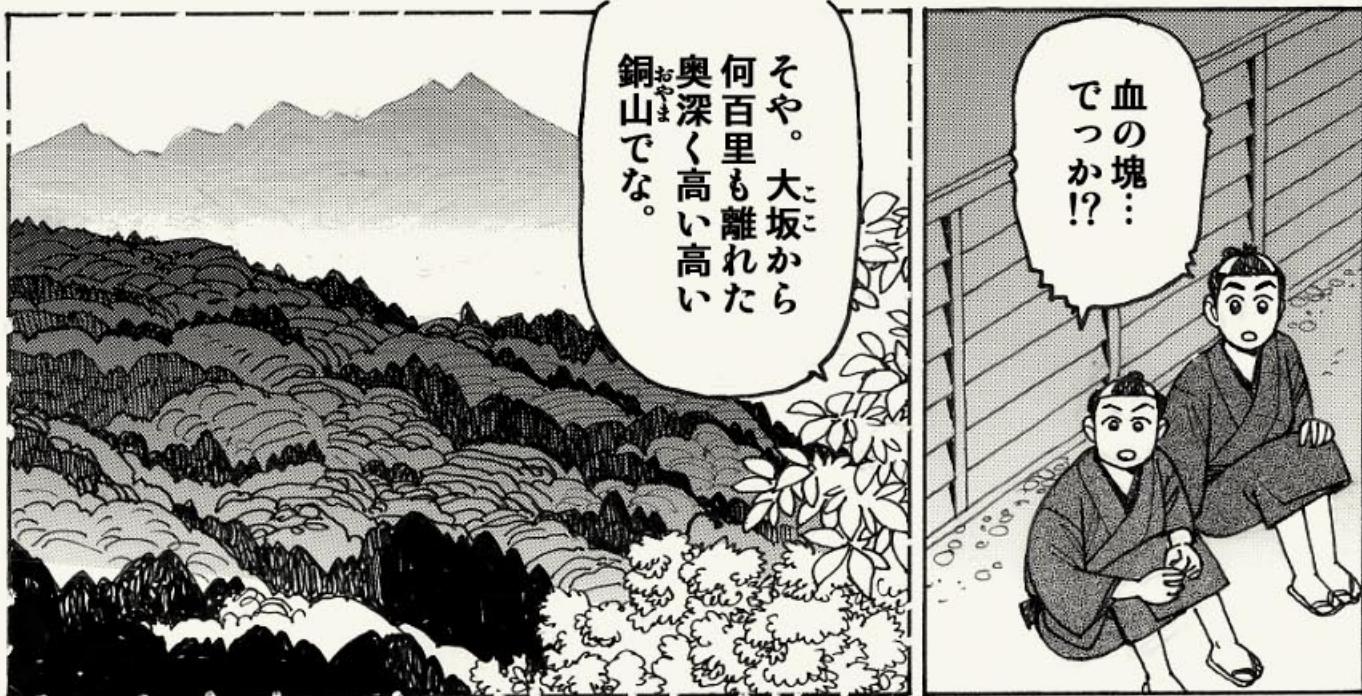
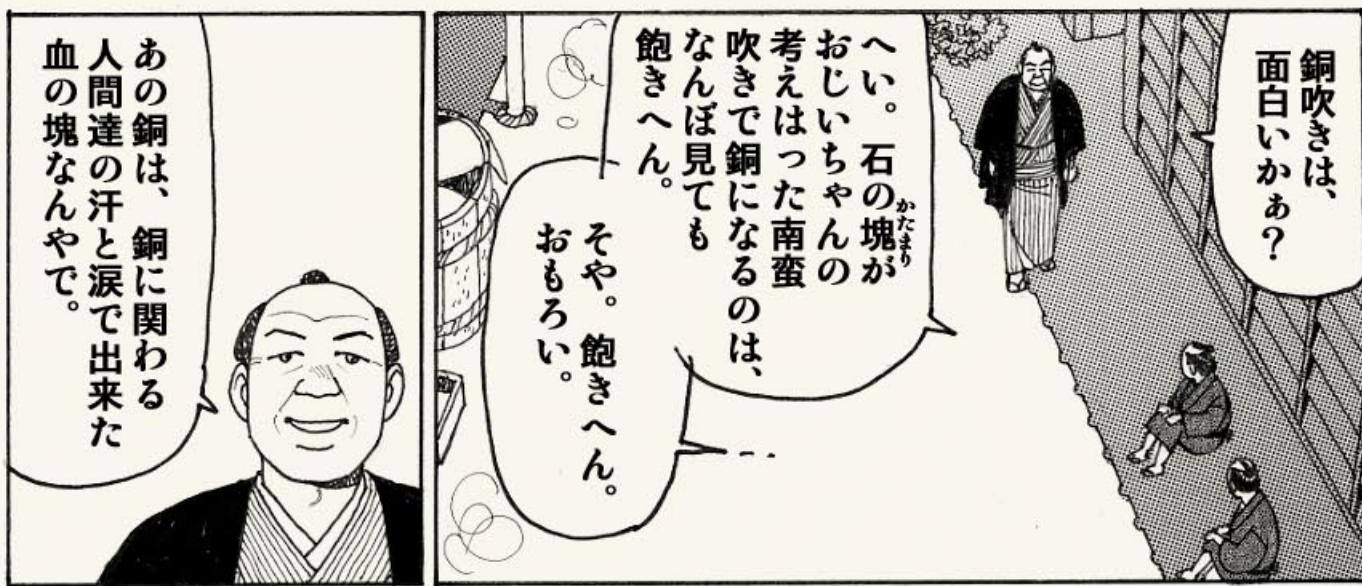
夫を稼業に励まさせたのは、
亡き義父・文殊院様のお教え、
「旨意書」を通しての事業精神と、
実父・蘇我理右衛門様の
銅吹き業の基礎と技術が
あつたからに他なりません。

いや。

日増しにこの長堀が
活気に満ちて
いきますなあ。







かなめしょうや
碎女庄屋(選鉱係)が
質の良い鉱石だけ選んで、
それを鉄鎌で一寸角に碎く。
それを薪と一緒に
焼き(がま)て、
焼窯に入れて、
一ヶ月ほど蒸焼きすると
二三割減つて、



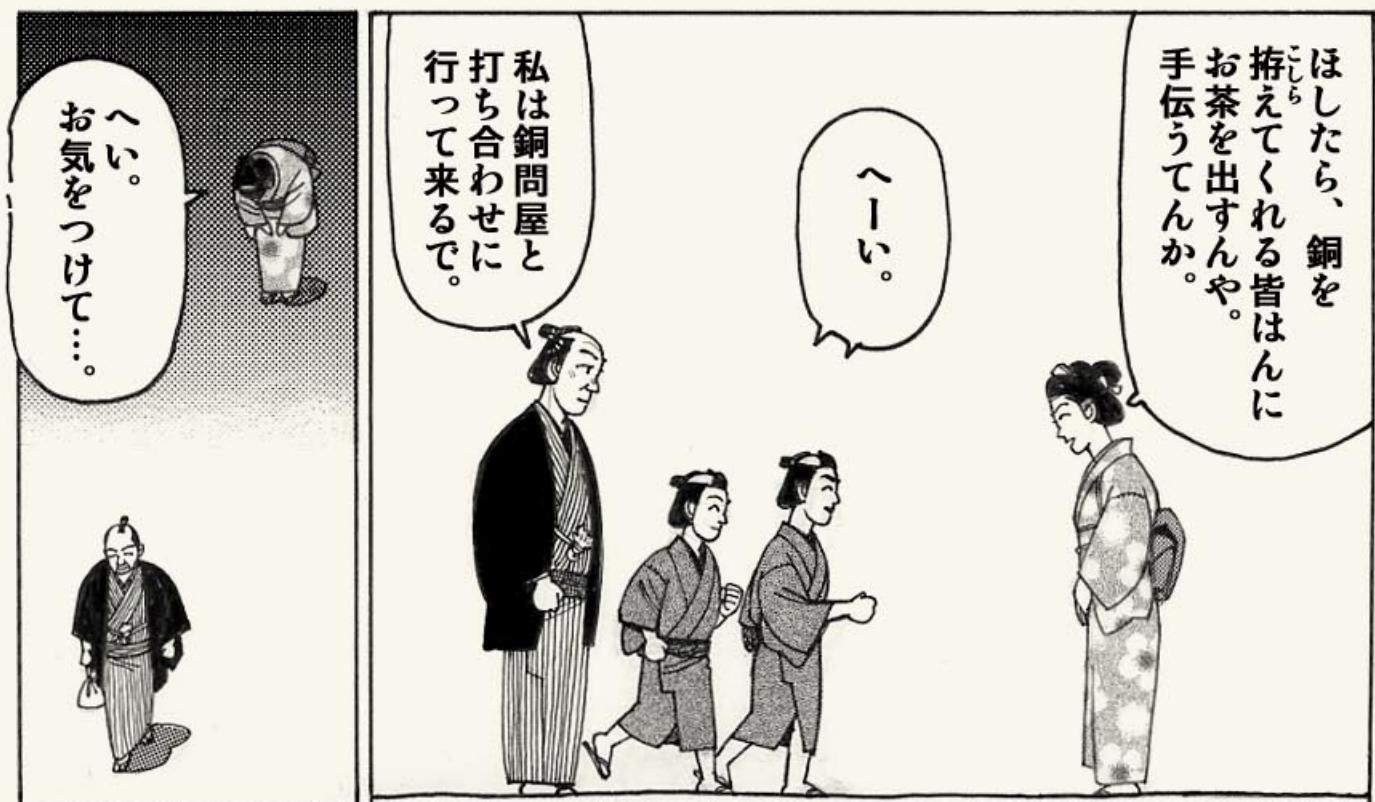
銅と鉄の酸化物の石英と
少しの硫黄を含んだ焼鉱になる。
今度は珪石と炭と一緒に
吹床(溶鉱炉)に入れて、
鞴で熱して溶かすと
カワ(硫化銅の塊)、鉄は
カラミ(珪酸鉄)になつて
浮いて、一番吹きや。

いやいや、まだやで。
そのカワを次の真吹床(まぶきとこ)に
入れて、また炭で溶かすんや。
それでやつとこさ出来るのが、
銅九割七分から九割八分の
荒銅の二番吹きなんや。

それが
荒銅ですか?

遠い遠い銅山から
何日も掛けて運ばれてきて、
南蛮吹きで九割九分の
銅になるんや。

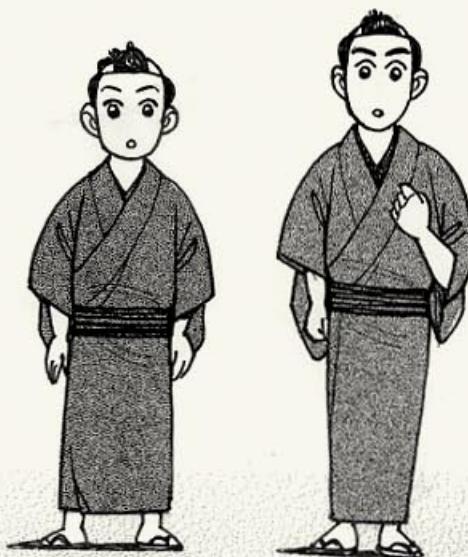




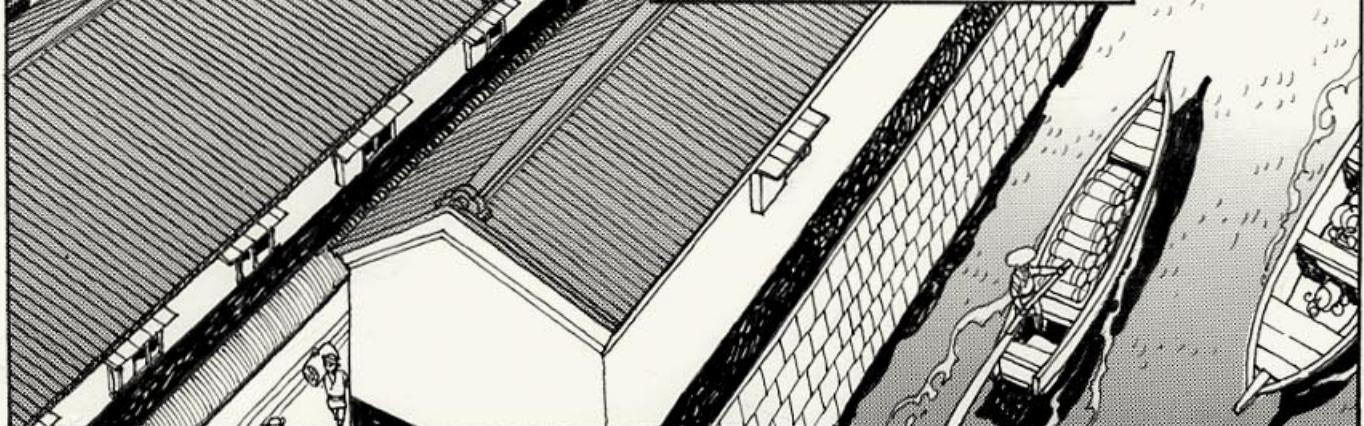
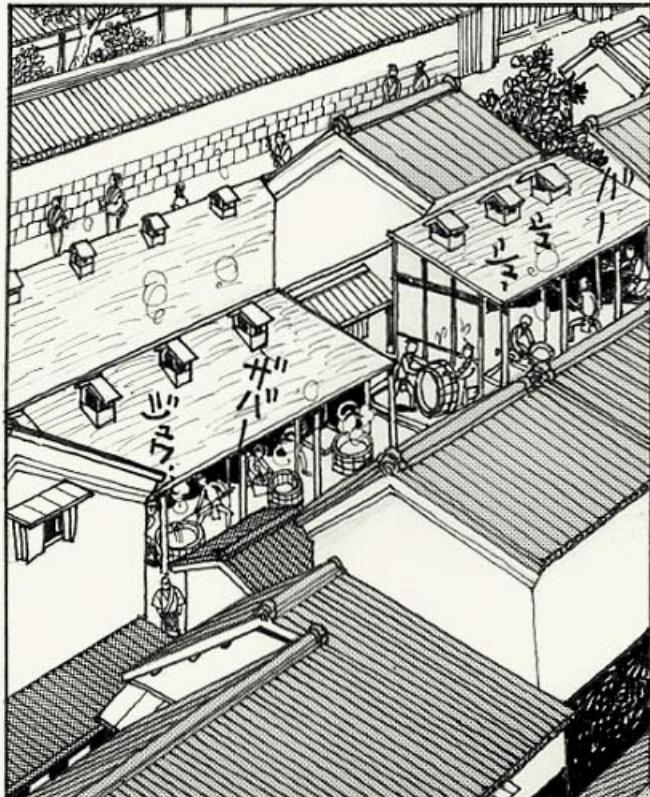


長男・熊之助は、
名を吉左衛門・友信と改め、
十五歳で泉屋三代目を継ぎ、

次男・亀之助は、
名を平兵衛・友貞と改め、
両替商を営みだしました。



なお、住友本家も元禄三年（1690）に
長堀の地に移しました。
泉屋三代目となつた友信は、
祖父・文殊院様と父・友以の教えをもとに、
江戸出店（中橋店）、長崎出店の開設、
備中（岡山）吉岡銅山や、
出羽（山形）最上の幸生銅山の経営と、
銅吹き（銅精錬業）ばかりではなく、
鉱山経営へと進出し、
泉屋の地歩を固めたのでござります。

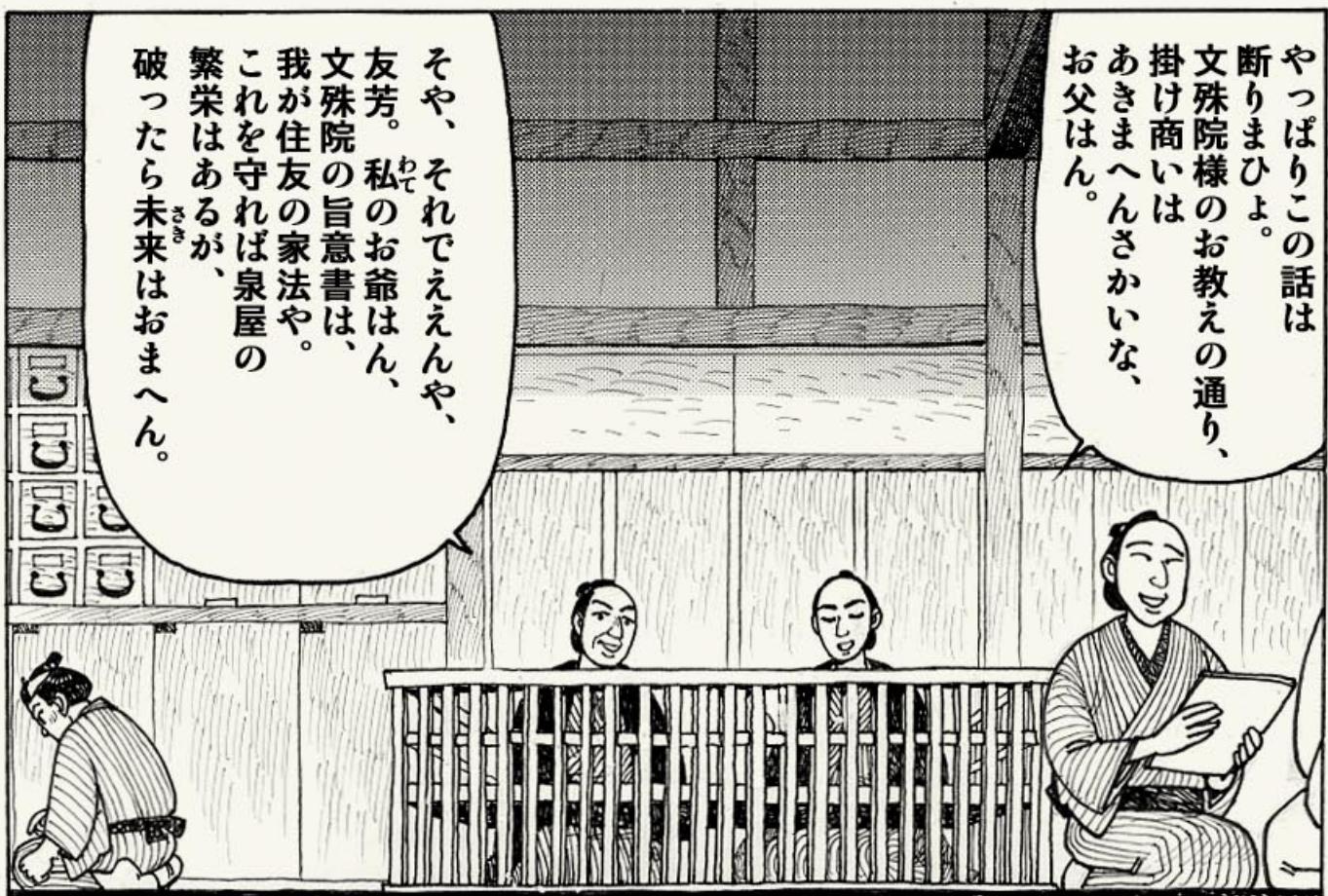


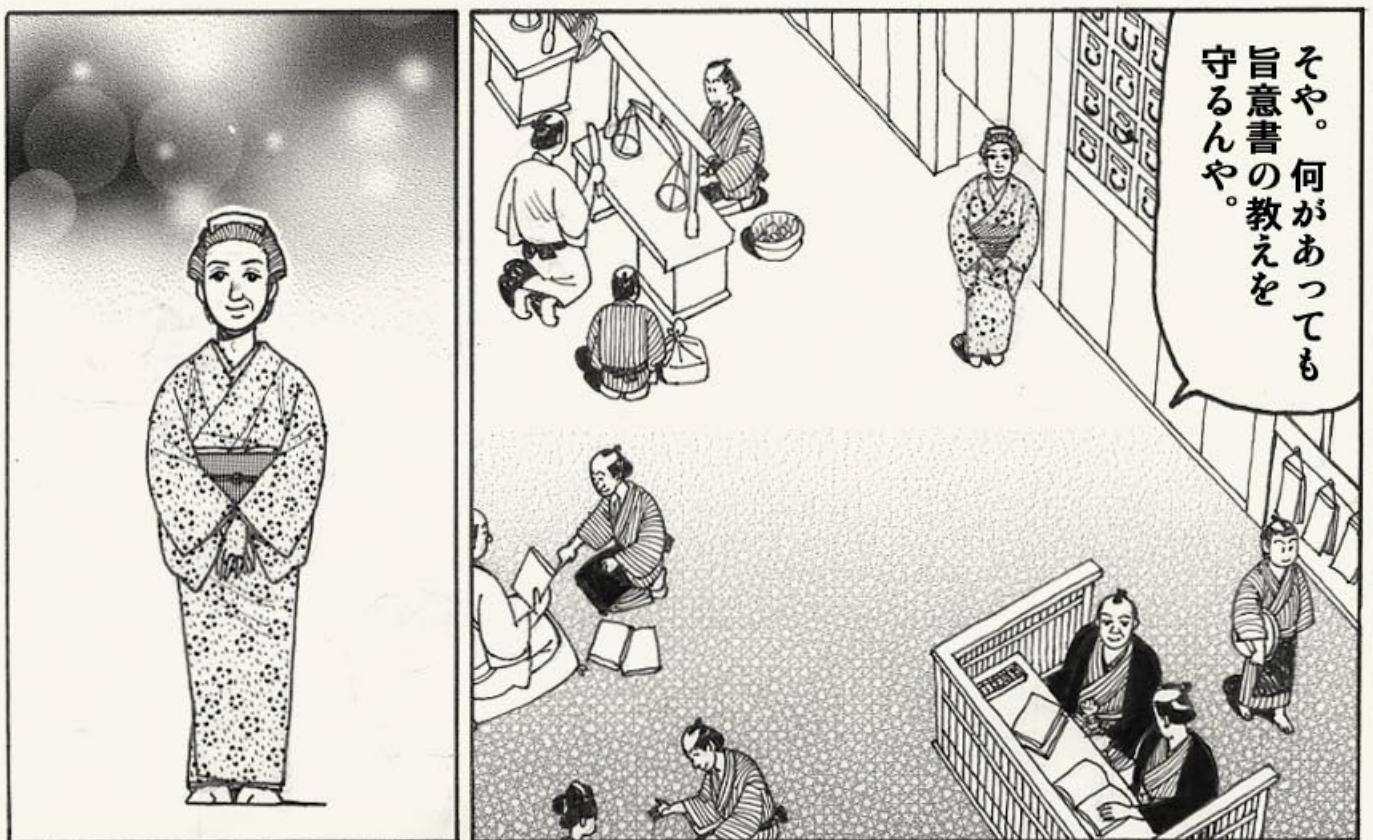
そして三十八歳で京に隠居し、
自分が跡を継いだ同じ歳ともよ十五歳の息子・友芳ともよに家督を譲り、
ときおり京より下り、
家業の指導にあたってくれています。

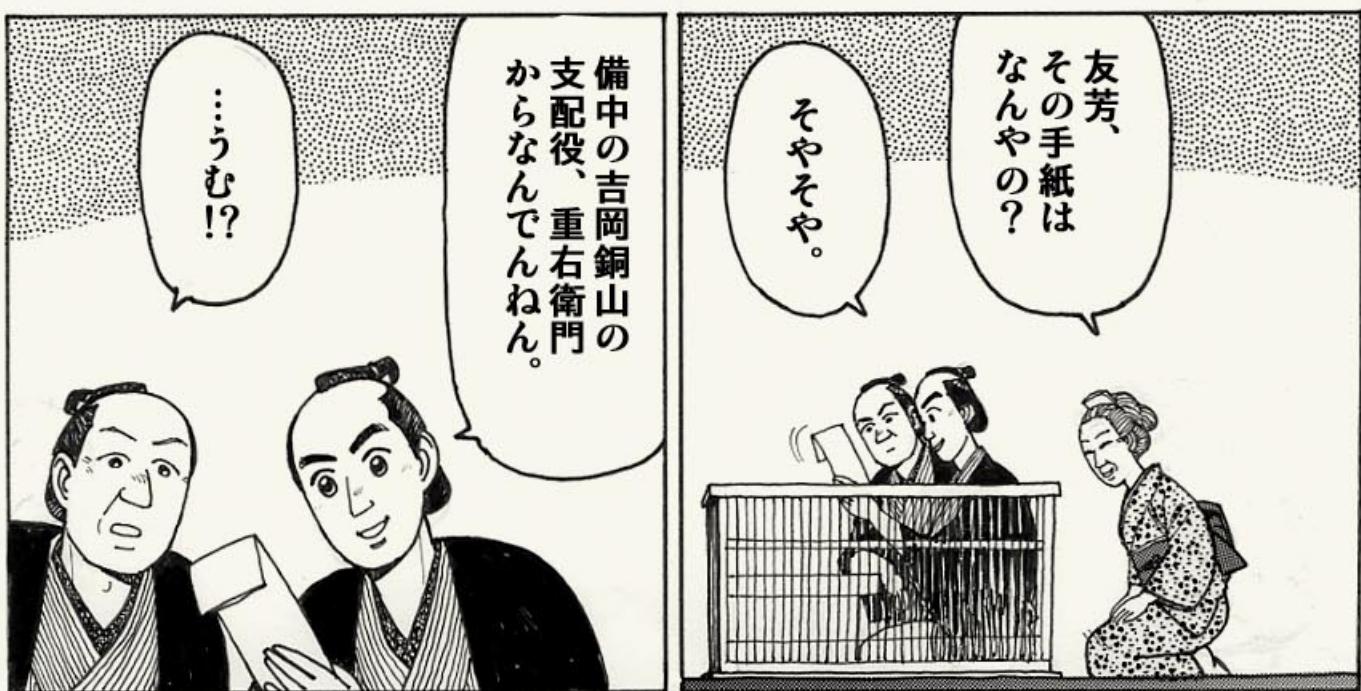
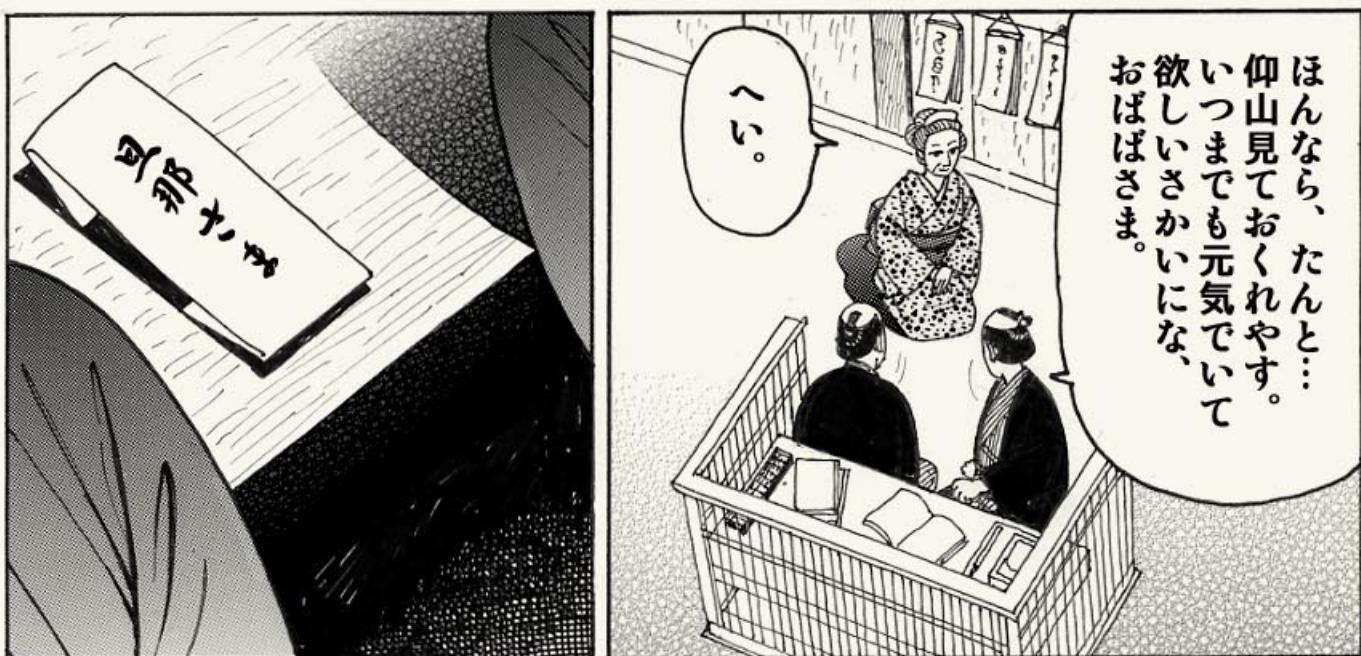


やつぱりこの話は
断りまひよ。
文殊院様のお教えの通り、
掛け商いは
あきまへんさかいな、
お父はん。

そや、それでええんや、
友芳。私のわてお爺はん、
文殊院の旨意書は、
我が住友の家法や。
これを守れば泉屋の
繁栄はあるが、
破つたら未来はおまへん。







前にうちの吉岡銅山でも
働いていて、長兵衛とい
うのが。
今は伊予の西条藩の
長谷坑（立山鉱山）にいてる
横番の長兵衛というの。

その横番、ひよつとして
坑道を上向きに掘り進む
「切上がり」が得意なので、
切上がり長兵衛という
男と違うか？

それがほんまやつたら、
泉屋に未来永劫の
繁栄をもたらしてくれは
るかも。それまへんな。

へい、そうどす。
その切上がり長兵衛が
「立川山の峰を越えた
赤石山の南斜面の
天領の山中に大露頭が
見える」という話を
持ち込んだというて
来たんでおます。



へい。すぐに
調べさせます。

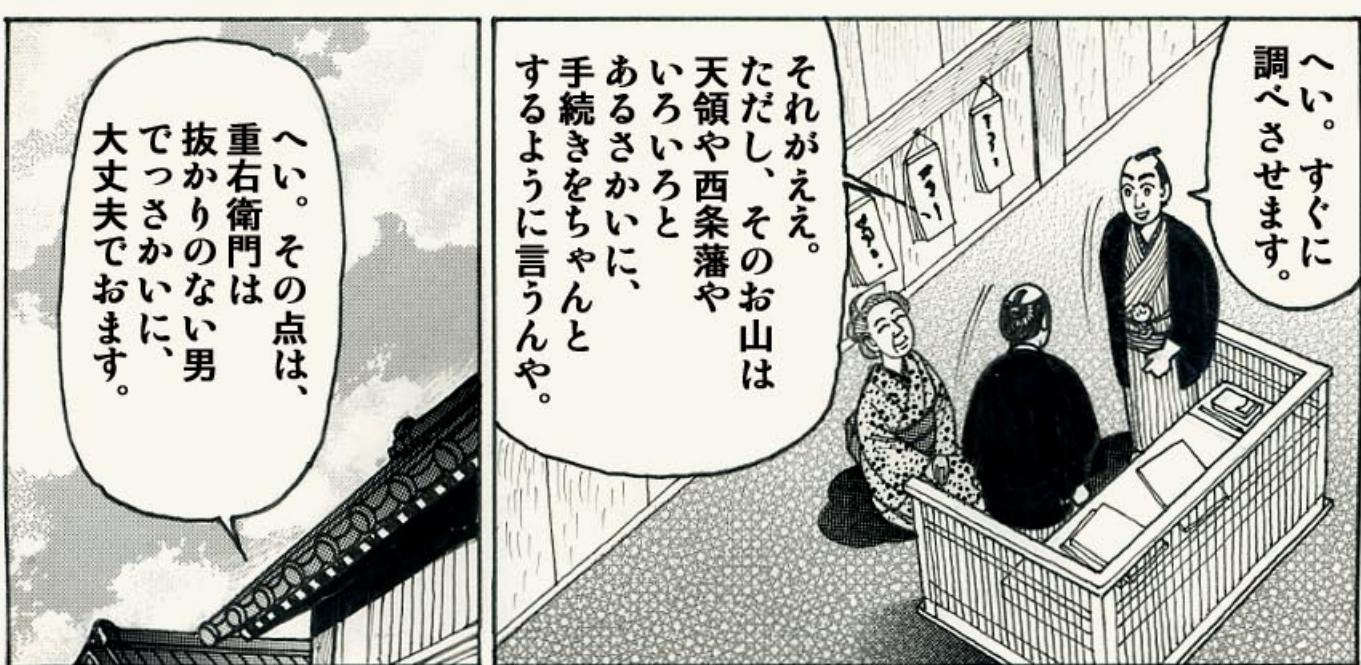
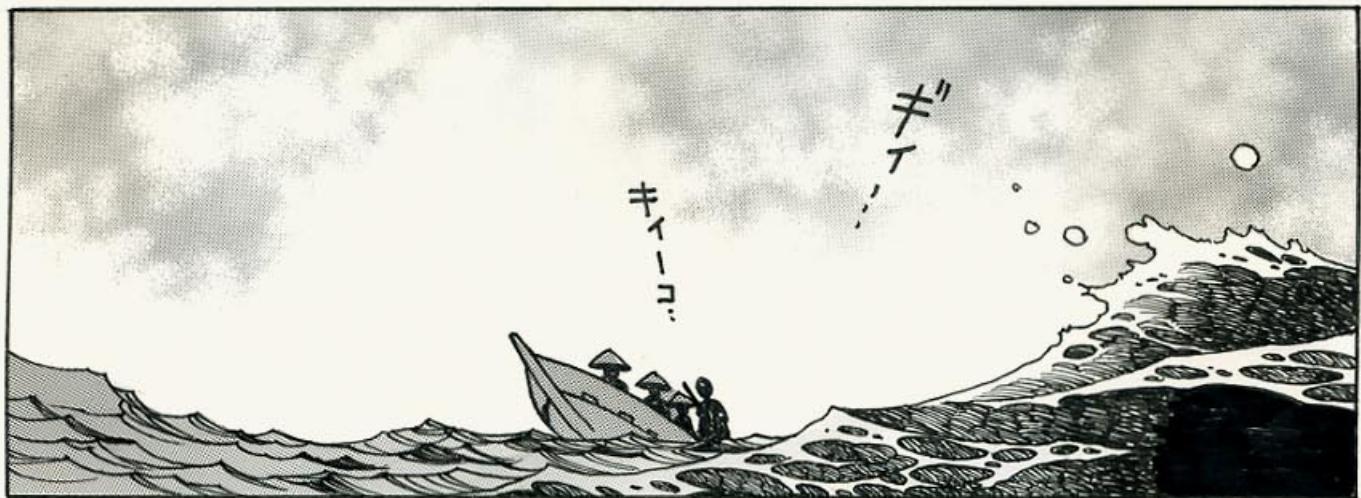
それがええ。
ただし、そのお山は
天領や西条藩や
いろいろと
あるさかいに、
手続きをちゃんと
するように言うんや。

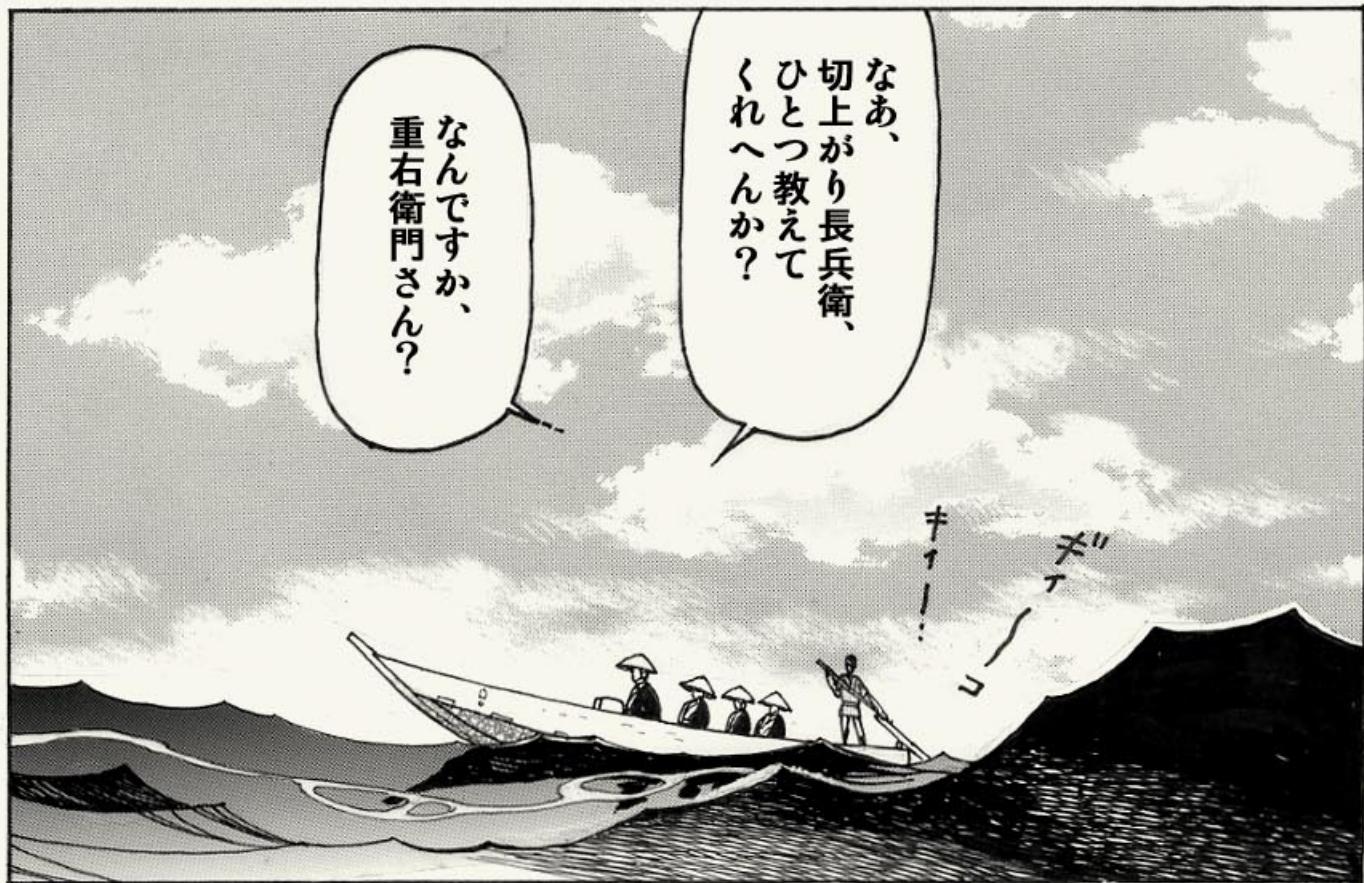
へい。その点は、
重右衛門は
抜かりのない男
でつさかいに、
大丈夫であります。

備後（広島）鞆
元禄二年（1690）九月一

キイーコ

ギア





おらは切上がり名人の
長兵衛などと
ふたつ名を頂いて、
これまでいくつもの銅山を
渡り歩いて参りましたが、

泉屋さんほど、
山で働く人間を大切に
扱ってくださるところは
他にはござえません。
そして山も何処よりも
大切になさっております。

うん

キヤ！

メア



おおきに…
おおきに…

だから、
泉屋さんにお知らせ
したかつたんで
ござえます。





伊予川之江





こうして、手代で吉岡銅山の支配役だった田向重右衛門は、手代の原田為右衛門、山留（鉱山技師）の治右衛門を従え、新居浜生まれの炭焼きの松右衛門を案内役とし、銅山を求めて、伊予の山に入つたのでございます。

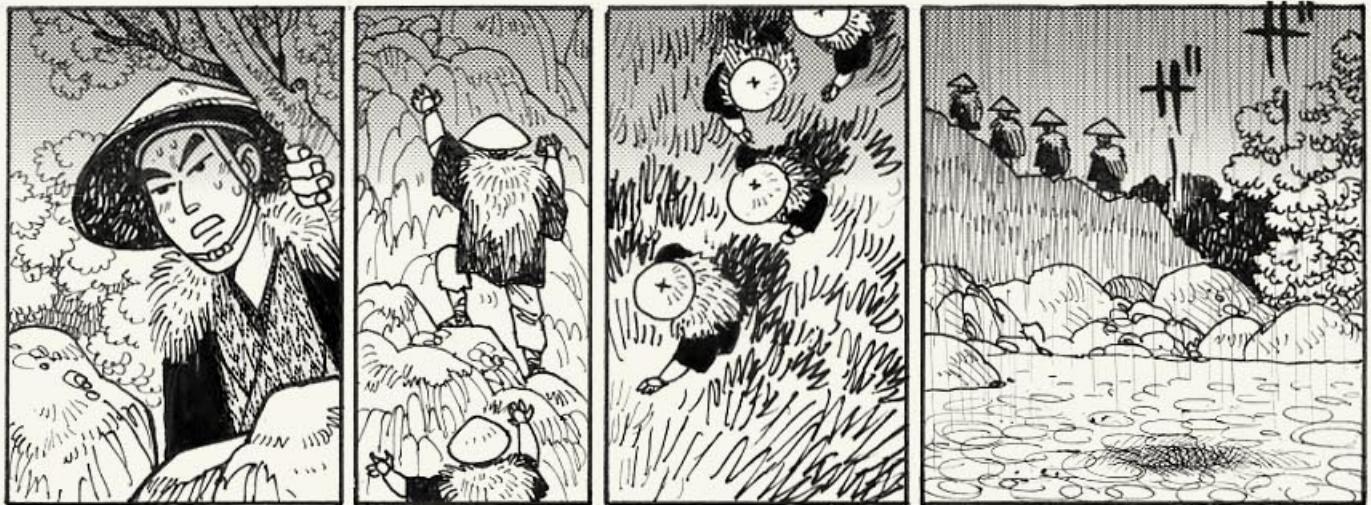


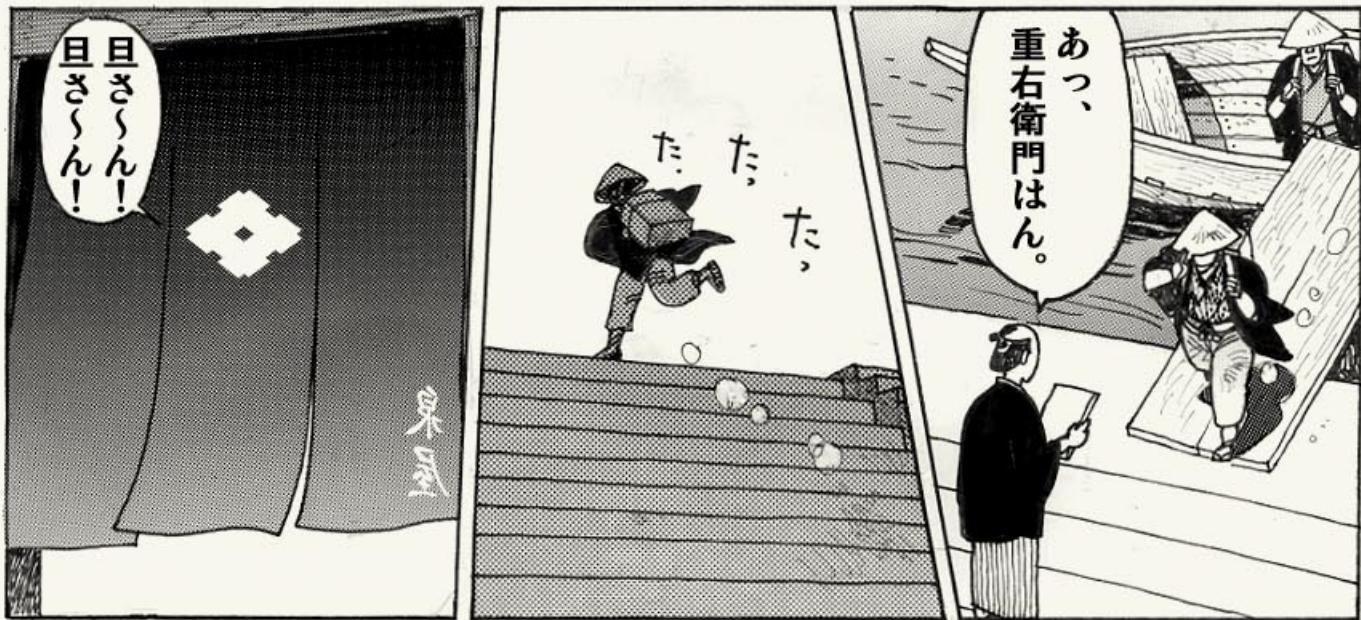
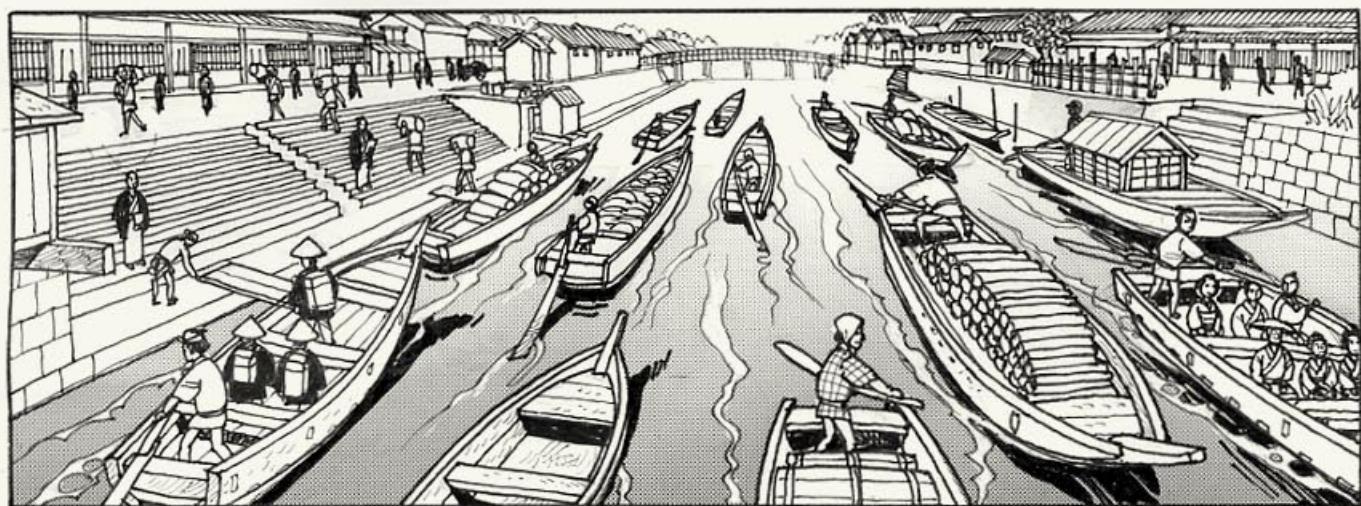
重右衛門たち一行は、天領の代官所への届け、大庄屋への断りを、忘れることなく行い、切上がり長兵衛に教えられた

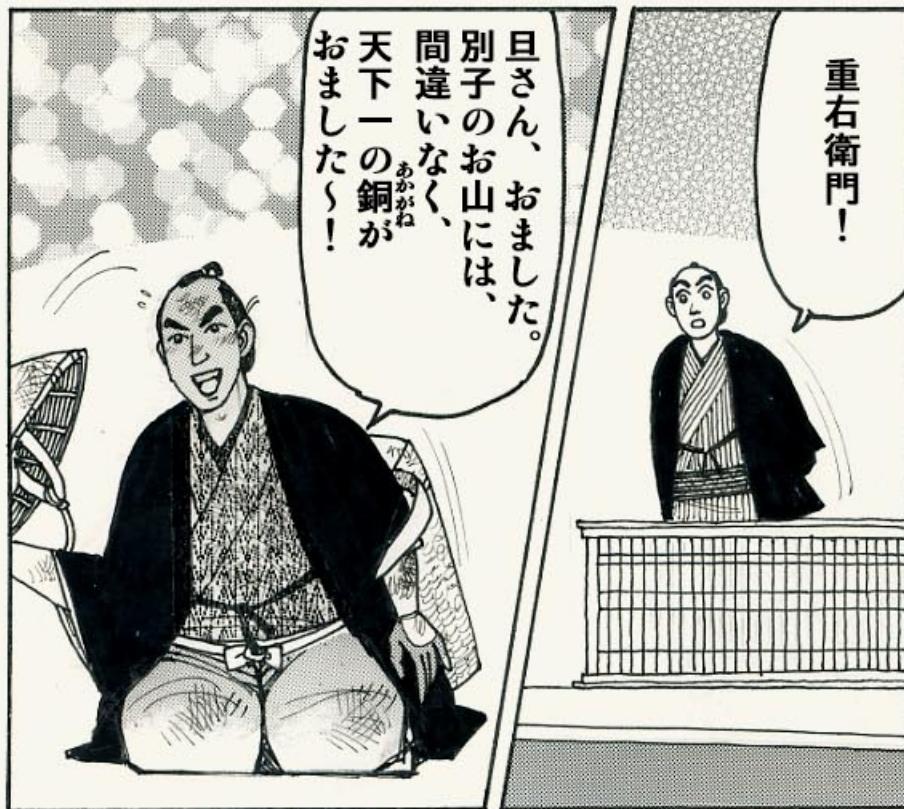


しかしそこは、前人未到の山中でございます。容易なものではございません。



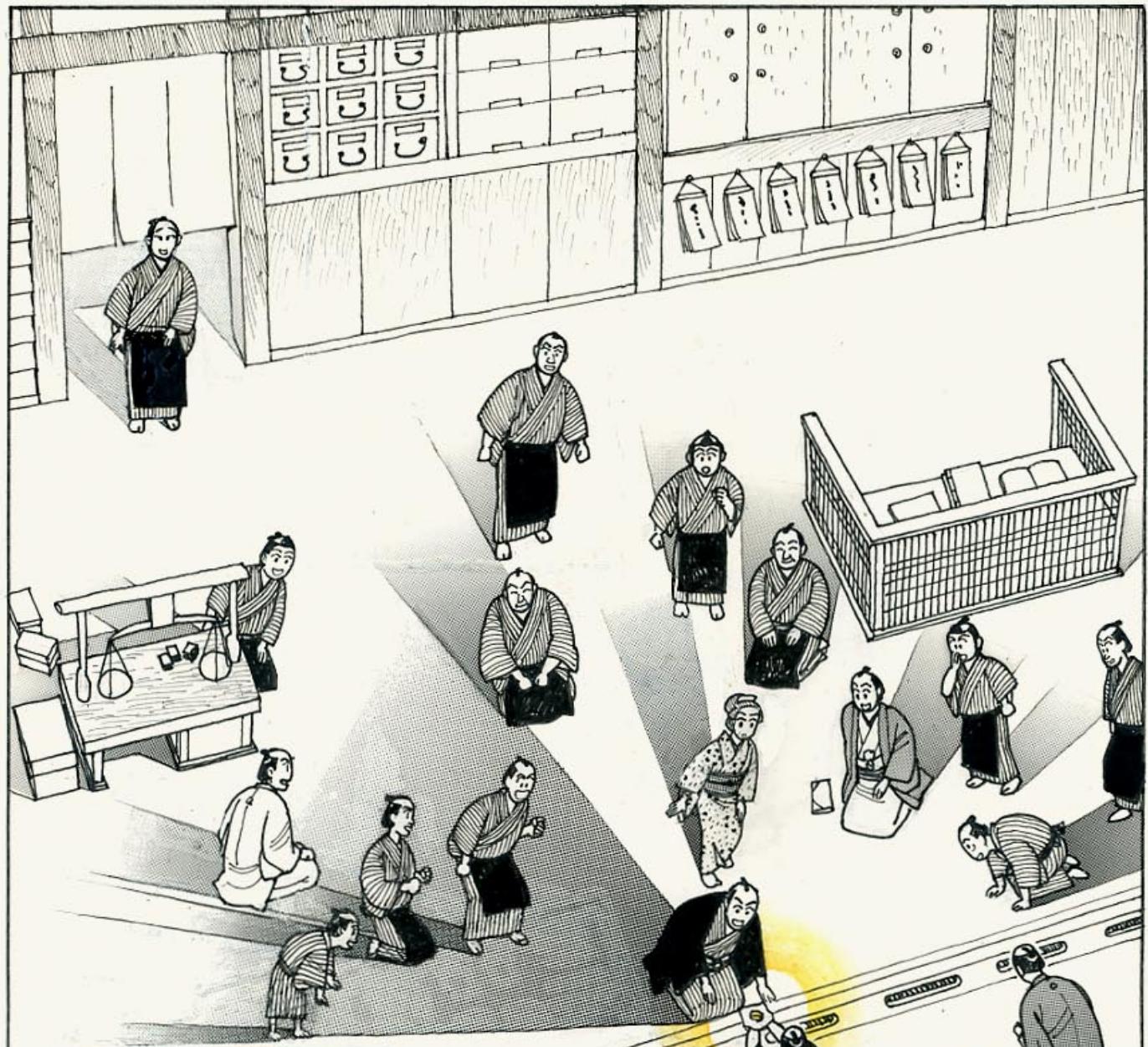






重右衛門！





それは元禄三年
九月のことございました。
しかし、泉屋住友が別子に
銅山を発見したからといって、
すぐに銅山の稼業がなせる
わけではなかつたのでござります。



文殊院の遺志を継ぎ、
人を大切にしてきたからこそ、
山の恵みがもたらされる。
山の恵みで人が幸せになる。
だが、思いもよらぬ試練が、
泉屋住友に立ちはだかる——。